Journal of the Ochanomizu University English Society
No. 1（2010）

2009 年準備大会 講演（概要）

変革の年にアメリカに住んで
――バークリー雑感

竹村 和子

※「今年」や「昨年」といった時を表す言葉は、基本的には講演時のものを使い、その後ろに年号を付しました。また帰国後に付け加わった事柄については、カギ括弧［　］で附記しました。

お茶の水女子大学の英文科（通称）は、お茶の水女子大学が新制大学になって誕生し華やかな歴史を刻んできましたので、新制大学発足後の 60 年目に当たる記念すべき年に「お茶の水女子大学英文学会」の設立に向けて着々と準備が整ってきておりますのは、本当に慶賀とすべきことと思います。なお「お茶の水女子大学英文学会」（略して「お茶大英文学会」）は、学科創設時より組織していた「英文科同窓会」を引き継ぎつつ、卒業生・修了生のみならず、在学生も、そして新旧教員スタッフも、みなが参加できる学術と親睦の会として出発する予定です。機関誌も発行しますが、年 1 回の大会の日に、お茶大から少し遠ざかっているみなさんも足をお運び下さって、同窓生の研究発表に、かつての学びの日々を思い出していただき、学究と再会の一時をお過ごしいただければと願っています。

それを思うにつきましても、英文科を長く背負ってこられた木原研三先生に、また英文学、英語学で多くの卒業生を送り出された野島秀勝先生、宮川幸久先生においでいただけないのはかえずがえすも残念です。あと 1 年早かったら、と悔やまれますが、けれども歴史は積み重なり、続いていくものです。これからのわたしたちの活動によって、先生方のご恩に報いたいと思っています。

さて、その記念すべき準備大会にお話をさせていただくことになって光栄に思っています。わたしは 1976 年に英文科を卒業し、1980 年に修士課程を修了した同窓生です。お茶大に赴任してきたのは 1996 年で、今年で 15 年目となります。今回はたまたま昨年の秋から 1 年間、米国のカリフォルニア大学バークリー校で在外研究をしており、つい先頃帰国しましたので、そこで経験したことなどをわたしの個人的レンズをとおしてお話ししたいと思います。

さてタイトルは、「変革の年にアメリカに住んで――バークリー雑感」ですが、みなさまもご存じのように、この 1 年（2008 年秋より）、アメリカは大きな変化を経験してきました。そのもっとも大きい変革

は、アフリカ系アメリカ人大統領の誕生です。実際、わたしの住んでいた家の近くの雑貨店では、選挙の翌日、ヒスパニック系の店主の女性に選挙のことを話題にすると、涙を浮かべてその感動を語ってくれました。選挙の日は夜遅くまで、目抜き通りは騒々しかったです。

その数か月前、たまたま名古屋で国際会議があり、そこでの基調講演者の一人マイケル･マスタンドゥーノ教授が「ブッシュ以降――アメリカの外交政策は多国間外交に戻るのか」というタイトルの講演をされて、そのなかで半年後の大統領選を占い、たとえ民主党になっても外交戦略はそうドラステッィクには変わらないだろうと述べました。つまりブッシュ政権ほどの「一方的な（unilateral）」外交にはならないにしても､経済などでは「二国間の（bilateral）」外交にならざるをえない部分があり､「多国間（multilateral）」なものにシフトするのは、期待に反してなかなか難しいだろうというのが、彼の観測でした。その観測をこの時点では裏切り、昨日オバマ大統領はノーベル平和賞の受賞者に選ばれたという報道があり、その授与理由として、ノーベル賞の選定委員会は以下の見解を示しています。

> Obama has as President created a new climate in international politics. *Multilateral* diplomacy has regained a central position, with emphasis on the role that the United Nations and other international institutions can play. Dialogue and negotiations are preferred as instruments for resolving even the most difficult international conflicts.（“Nobelprize.org”より、強調竹村）

他方で、この受賞も含めてプラハでの核廃絶演説や、カイロでのパレスティナ難民に理解を示した演説といった外交の華々しさと比べて、国内の問題、とくに医療保険改革では熾烈な反対を共和党から受けており、またアフガン増兵についても、国内世論の支持はかならずしも高くない現状です。医療保険改革に関しては国民の関心が高いので、メディアがこぞってその報道に熱を上げています。また当選時においても、彼の政策、とりわけアフガン増兵をめぐっては、彼の理想とは逆に、国を二分していて、わたしのまわりには懐疑的な人が多かったように思いました。ただ選挙直後や就任式のさいには、少なくともバークリーでは、アフリカ系アメリカ人の大統領誕生ということもあって、熱狂的に迎え入れられたように思います。UC バークリーは、学生運動が盛んだった場所としてコロンビア大学とともに有名ですが、オバマ大統領の就任演説のときには、その学生運動発祥の地のスプロウル・プラザに、縦 10 メートル横 15 メートルか、それ以上の大型スクリーンが据えられて実況放送され、学生、教職員、町の人たちがぎっしりと詰めかけました。実況放送をするだけでなく、スピーチもあり、ブラスバンドの演奏もあって、当日は、たしか学生が進行役を務めたと記憶しています。その数日前より、学長名でビラやメールが発信されました。ちょうどこの日は新学期の初日だったのですが、就任式のために授業を休講にするということはないが、“academic reasons”ゆえに就任演説中継を受講生に聞かせるという選択肢もあるだろう、という面白い表現をしていました。また職務に差し支えないかぎり、職員が就任演説を聞くために 2 時間ほど職務から離れるのを認める裁量を上司に与える、というような趣旨のことも書かれていました。

さて UC バークリーがある町バークリー市は､サンフランシスコからベイビリッジを渡った対岸にあり、この一帯は、南のスタンフォード大学があるサンノゼまでをベイエリアと総称されています。カリフォルニア州はヒスパニック系やアジア系の移民がたいへん多いところですが、わたしも今回それをあらためて感じました。まず大学のキャンパスにアジア系の学生がとにかく多くて、最初ここはアメリカの大学だろうかと錯覚したほどです。聞くと、学生総数の半数がアジア系で、その他、ヒスパニック系、アフリカ系などがいますので、白人学生の人数は相対的に少なくなります。その表れの一つは生協で売られているベントウで､日本で言う牛丼弁当､天ぷら弁当､しぎ焼き弁当のようなものや､寿司が大量に売られています。そのバラエティと数は、お茶大の生協の弁当をはるかに上回り、アジア系のみならず、多くの学生、教職

員が普通に買って食べています。

バークリーやサンフランシスコに関するかぎり、食べ物でホームシックになる心配は少ないように思います。わたしは 1990 年代の半ばに中西部のミルウォーキーにいましたが、そこでほとほと食べ物に苦労しました。けれども今回そこを訪れたおりに、その当時利用していたスーパーマーケットに立ち寄ったところ、当時は魚と言えばコッド（鱈）しかなかったようなところで、現在ではそれ以外の種類の魚も大々的に売っており、また寿司バーさえもできていたのは、まったくの驚異でした。ベイエリアのみならず、アメリカ全体で、食生活が急スピードでアジア化、あるいはグローバル化しているように思いました。バークリーでとくに美味しいと思ったのは、インドネシア料理とブラジルのサルバドル料理でした。

ちなみにバークリーは有機野菜や地元産物などを使った北カリフォルニア料理の発祥地で、それを有名にしたレストランは「シェ・パニース」です。このレストランを開いたアリス・ウォーターズの名前を聞いた人もいるかと思います。食の重要性を 30 年以上前から説いていた人で、オバマ大統領夫人のミシェル・オバマに影響を与え、現在ホワイトハウスの庭の一部が家庭菜園化され、児童の食育教育に当てられています。食育は、お茶大でもその研究と普及活動が盛んですね。他方でスターバックス以来、アメリカのコーヒー環境も、アメリカン・コーヒーから、（イタリアが本場だった）エスプレッソ系へと劇的に変わりましたが、スターバックス（シアトルで開業）のそもそもの先駆けであったピーツ・コーヒー＆ティも、バークリーが発祥の地です。歴史や風土に根ざした「地理的ローカリティ」から、「文化的ローカリティ」へ、そしてそれが（スターバックスのように）資本と結合すればグローバルに展開するという、近年の「トランスナショナルなローカリティ」の行方を見る思いでした。

食べ物に偏重してしまいましたが、たとえばわたしの研究室があったフロアでは、研究室のドアにかけられたネームプレートでは、どう読んでよいかわからない名前が数多く見られました。つまり大学のファカルティに多様な言語出自の研究者が雇用されているということです。事実、到着後すぐに招待された会食では、たまたま学部長も含めて全員アメリカ以外で生まれて、アメリカに移住してきた人たちでした。高等教育のグローバル化が確実に進行しているということをひしひしと感じました。

そのようななかで不思議に思ったのは、日本人留学生がきわめて少ないということでした。わたしは最初の半年ほどのあいだ、日本人には一人も出会わなかったような気がします。その後、数人と知り合いになりましたが、その一人と話した折にも、日本人が見あたらないという共通の印象を持っていました。戦後半世紀経ったいま、若者が日本のなかで自足してしまい、外国にわざわざ留学したいと思わなくなった、あるいは熾烈に「外に出たい」という欲求が少なくなったのではないかと思いました。それに比して、中国、韓国、インドネシア、フィリピンなど東アジア、東南アジア、そしてネパール、インドや、イランなど南アジア、中近東の留学生はとても元気で溌剌とし、世界のなかで自分を模索していました。我彼の相違を痛いほど感じました。相対的に日本のプレゼンスは、たいへん弱くなっていると感じました。[帰国後 1 年以上経ったいま、同様のことが、就職活動との関連で、日本でも語られるようになったようです]。

UC バークリーはリベラルな大学で有名ですが、バークリー市は大学よりもリベラルだと聞きました。しかし人種差別がなくなっているというわけではありません。この地にもいまだ隠微に存在する人種差別について、口角泡を飛ばして語ってくれた研究者がいましたが、わたしが実感したのは、映画祭でのことでした。

6 月の末、恒例のプライド映画祭、つまりクィア映画祭がサンフランシスコで開かれました。サンフランシスコはニューヨークと並ぶゲイ解放運動のメッカで、今年（2009 年）のアカデミー賞はサンフランシスコのゲイ活動家ハーベイ・ミルクの伝記映画が受賞しましたが、10 日ほどにわたって開かれた映画祭のなかで、観客に白人の割合が多かったことに驚きました。サンフランシスコですらそうですから、米国の他の都市の映画祭はさらに白人中心なのではないかと思います。ちなみに最近ＬＧＢＴ（レズビアン・

ゲイ男性・バイセクシュアル・トランスセクシュアル）というフレーズがよく使われますが、映画祭のみならずこの時期に開催されたＬＧＢＴ関連のイベントも含めて、実際にはゲイ男性が中心のように感じました。セクシュアリティの差別に、ジェンダーの差別が覆い被さっている現状が、サンフランシスコですら改善されてはいないのです。人種差別の話題に戻ると、映画祭では４つの映画館が同時に使われ、その３つはサンフランシスコで、あとの一つがバークリーにありました。とくにバークリーの映画館に行ったときには、そこで上映されていたのが白人のレズビアンが主人公の映画だったとはいえ、おそらく観客は、アジア系ではわたし一人か、いたとしても数人だけだったのではないかと思いました。映画館から一歩外に出ると、アジア系、ヒスパニック系など多様な人種・民族が生活しているので、その対比が強烈でした。ちなみにこの映画（*Not Fade Away*）は、アルツハイマーになった母親を介護するレズビアンの話で、わたしは日本でも上演したらよいと思って、少し話を進めましたが、残念ながらそれは叶いませんでした。

わたしが滞在中の 2009 年 6 月にハーバード大学のヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニア教授が自宅で公務執行妨害のため逮捕されるという事件がありました。事の次第は、彼が帰宅したところ、自宅の鍵を開けられず、タクシー運転手（アフリカ系アメリカ人）と一緒に鍵をこじ開けようとしていたところ、近所の人から「黒人の男 2 人が家に押し入ろうとしている」と通報され、やってきた警官と、すでに自宅に入っていた教授のあいだで口論になって、教授が公務執行妨害で逮捕されたというものです。その逮捕も本当に馬鹿げたものですが、それについてオバマ大統領が批判するコメントをしたので、大きく問題になりました。じつはその場面をわたしはライブで見ていました。医療保険改革が行き詰まり、それを打開するために大統領が国民に向かって TV 演説するというので、数日前からその予告がなされており、多くのアメリカ人はテレビの前に座っていたと思います。医療保険についてはオバマ大統領も苦慮していたので、演説とその後の記者会見では、言葉を選んで慎重にしゃべっているという様子が伺えました。そしてその最後に、このヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニア教授に関する事件についてどう思うかという、まったく関係のない質問が唐突に記者から発せられたのです。そのとたん、オバマ大統領が一瞬リラックスしたように、わたしには思えました。彼は饒舌になったのです。これまでは、大統領選のときにも、人種問題については用心深く発言していました。しかしこの記者会見の直前に訪れたガーナ訪問では、二人の娘を伴っており、そこでおそらく初めて彼は人種問題に触れる演説をしました。ガーナ訪問で、彼が一つのハードルを越えたなというような印象をわたしは受けました。そのような文脈があったために、たぶん彼のなかでは、医療保険よりも人種問題のほうが、この時点ではリスクが少ない話題と映ったのかもしれません。ちょっと気を緩めて、本心を語ったような印象を受けました。わたしの個人的な印象ですが・・・。彼の返答の全体が、動画とともに boston.com に掲載されています。下の文章もそこから引いてきました。

> "Now, I've – I don't know, not having been there and not seeing all the facts, what role race played in that. But I think it's fair to say, number one, any of us would be pretty angry; number two, that the Cambridge police acted stupidly in arresting somebody when there was already proof that they were in their own home. And number three, what I think we know separate and apart from this incident is that there is a long history in this country of African-Americans and Latinos being stopped by law enforcement disproportionately. That's just a fact."

けれども彼のこの発言は、警官の行為を”stupidly”と形容したために、警官たちが反発し、大きな騒動になりました。問題を収拾するために、その後ホワイトハウスに当の教授と警官の双方を招待し、ビールで乾杯という「ビール・サミット」をしましたが、もちろん表面的に糊塗しただけものです。人種差別の根の深さが露呈された事件でした。それに、わたしにとっては何といってもヘンリー・ルイス・ゲイツ・

ジュニアは、アフリカ系アメリカ文学研究の第一人者で、ポストコロニアル批評とアフリカ系アメリカ文学研究を繋ぐ研究者であると思っています。授業でも彼の業績はたびたび取り上げますし、なによりも彼は「W. E. B. デュ・ボイス」の名を冠した「アフリカおよびアフリカ系アメリカ研究所」の所長ですので、その当人が人種差別の被害者になったというのは大きな出来事でした。

さて、お茶大でも近年、多くの研究集会や教育イベントが開かれるようになりましたが、それらが児戯に等しいと思えるほど、たくさんのパネルや講演会が大学のなかで毎日、複数、あちこちで開かれていました。主催は学科であったり、研究センターであったり、研究グループであったり、学生サービス部署であったり多彩で、聴衆も学部生を含む学生や教員、研究者たち、また町の人たちでした。（それらの紹介は、紙面の都合上省略）。村山春樹と宮崎駿の講演会もありました。運悪く両方とも出席することは叶いませんでしたが、大変な盛況ぶりだったと聞いています。日本を代表する人気講演者が村山春樹と宮崎駿であるというところに、現在の日本文化の世界的な位置づけが期せずして表れているような気がしました。

訃報についても、この 1 年はアメリカにとって節目と言えると思います。マイケル・ジャクソンの死の報道はあまりに圧倒的で、美空ひばりと石原裕次郎を足して、さらに累乗化するとこうなる、というぐらいの量でした。友人のなかで、とくにフェミニストやクィアの批評家に、彼のファンが多かったように思いました。自分の人生の歩みそのものだと語っていた人もいましたが、年齢がもう少し上の、もう少し保守的な人は、彼がこんなに美しい若者だったとは思わなかったと話していて、年齢や関心や人種による反応の複雑な違いを垣間見ました。

エドワード・ケネディの訃報報道は、わたしが予想していた以上に大きく、暖かいものでした。わたし自身は、1969 年のチャパチデック事件が鮮明ですし、他の兄弟と比べてカリスマ性に欠けるように思っていましたが、リベラル派上院議員としての影響力と、キングメイカーとしてのカリスマ性、そして医療保険改革に対する彼の不変の信念が、大きく報道されました。彼のオバマ大統領支持が、民主党選挙でのオバマ勝利の一因になったと言われています。「リベラルのたいまつがテッド・ケネディからバラク・オバマに引き継がれた」という物語が流布するようになりました。しかしその中身を充填していくのは、これからのオバマ政権の行方しだいでしょう。[2010 年 1 月におこなわれた補欠選挙では、彼の議席（長く続いていたケネディ家の議席であり、民主党の象徴的な議席）を共和党に奪われ、2010 年 11 月の中間選挙ではさらに民主党は大敗しました。オバマの演説のなかの有名な一節（"I say to them tonight, there's not a liberal America and a conservative America – there's the United States of America. There's not a black America and white America and Latino America and Asian America; there's the United States of America"）を実現していく道の険しさが、むしろ最近ではクローズアップされることになったようです]。

昨年（2008 年）に起きた大事件はアメリカに端を発した経済恐慌（リーマンショック）ですが、そのせいもあってカリフォルニア州が経済破綻しました。それによってまたたく間に、教育、福祉を含め、さまざまなサービスが低下しました。アーノルド・シュワルツネガー知事はその責任を問われて、窮地に立たされましたが、そのさいの演説がなかなか面白かったので、引用します。カリフォルニア知事の公式サイト（Office of the Governor）からの引用です。

> I know the consequences of these cuts are not just dollars.
> I see the faces behind those dollars... I see the children whose teacher will be laid-off...
> I see the Alzheimer's' patients losing some of their In-Home Support Services...
> I see the firefighters and police officers who will lose their jobs.
> People come up to me all the time, pleading, "Governor, please don't cut my program."
> They tell me how the cuts will affect them and their loved ones.

I see the pain in their eyes and hear the fear in their voice.
It's an awful feeling. But we have no choice.
Our wallet is empty. Our bank is closed. Our credit is dried up.
I know for many of you, these will be the hardest votes you will ever make.
But the people sent us here to lead not only in times of prosperity but also in times of crisis.
We must make these cuts and live within our means, because what is the alternative.
If we don't act, the state will simply run out of money and go insolvent.
We are not Washington. We cannot print money. We cannot run up trillion-dollar deficits. We can only spend what we have.
That is the harsh but simple reality.

これは 2009 年 6 月になされた演説ですが、それ以降も経費削減はどんどん続き、カリフォルニア大学も 8% の全教職員の給与カットと、いろいろな教育プログラムの廃止や TA の縮小のみならず、学費値上げも実行されるようになりました。それに対して、大々的なデモ運動が起こり、わたしが帰国する直前に、カリフォルニア大学すべてのキャンパスで教職員と学生のストライキとデモ集会が開かれました。バークリー校がもっとも盛大なデモだったようですが、その集会は本当に圧巻で、学生・教職員のエネルギーの大きさのみならず、次々と演説する彼女たち彼らの、学生を含めた演説のうまさに舌を巻きました。すでに 20 才ぐらいのときに政治家の素質を備えた人材、つまり、自分の考えを整理し、それを説得的な言葉にし、そして雄弁に演説する能力を身につけていると思いました。日本にいても日頃から感じていたことではありますが、わたしたちはもっと自分を語り、自分の意見を明瞭に伝え、そして対話、討論する文化を育んでいく必要があると実感しました。

最後に、ベイエリアのお茶大同窓会に参加させていただいた模様をお話しいたします（詳細はこちらへ）。そのさいに感じたことは、母校に対する思いの深さでした。それぞれの年代で、母校とはどこか繋がっているように思いました。また、アメリカの大学によく見られる、卒業後も継続して母校を作っていくという文化が、ベイエリアの同窓生のなかに醸成されているように思い、しかしその受け皿がお茶大自体のなかにまだしっかり作られていないことを実感しました。さきほどのデモのプラカードのなかには、“They make the crisis”“We make the university”と書かれていました。大学に所属している者は crisis を引き起こさないように、そして、教職員、在校生、卒業生ともに、we make the university という心意気のなかで、これからのお茶の水女子大学英文学会が続いて行ければという願いをこめて、わたしの話を終わらせていただきます。ありがとうございました。